様式 C-19

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 15 日現在

機関番号：22604
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2010～2013
課題番号：22320175
研究課題名（和文）東南アジアにおける人の移動と帰還移民の再統合に関する社会人類学的研究
研究課題名（英文）Human Flow and the reintegration of return migrants in South East Asia: Social Anthropological perspective

研究代表者
伊藤　眞（ITO MAKOTO）
首都大学東京・人文科学研究科・教授
研究者番号：60183175

研究成果の概要（和文）：
グローバル化した世界での移民経験は、男女を問わず契約労働者の人生設計に多様な選択肢を与えつつある。帰還移民の中には、海外で取得した資金を新築などの一時的な消費で終わらせることなく、新しいビジネスに投資する者、あるいは、社会福祉活動に参与することで資金を生かそうとする者も現れている。かつての出稼ぎ型移民労働に比べ、現在の移民労働はよりシステム化された制度の中にありながら、新しい起業家たちを生み出す機会を提供していることが、本調査研究を通じて明らかにされた。

研究成果の概要（英文）：
Experiences as migrants in the globalized world are giving various choices to contract workers' life plan regardless of man and woman.
Among return migrants, we can find those who invest their fund in a new business, or those who try to use funds even for social welfare activities, without consuming their funds for temporary purpose such as one for new housing. Migration today has got more systematically organized than traditional type of migration, and has been ruled by migration industries. But, according to our finding, even in such conditions, migration today gives many opportunities to emerge kinds of new entrepreneurs among migrants.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	5,700,000	1,710,000	7,410,000
2011 年度	5,700,000	1,710,000	7,410,000
2012 年度	3,200,000	960,000	4,160,000
年度			
年度			
総　計	14,600,000	4,380,000	18,980,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学
キーワード：文化人類学、東南アジア、インドネシア、人の移動、家事労働、海外研修生、帰還移民、エスニック・メディア

１．研究開始当初の背景

近年の国際労働移動の流れは、伝統的な出稼ぎ労働から契約労働への移行である。インドネシア国内に浸透する労働斡旋企業

は、従来と比べてより大規模な人員を諸外国に送り出すことを可能にする。一方、こうした大規模な労働力の調達は、契約期間終了後に大量の帰還移民を生み出す。その結果、今やインドネシアの地域社会においても、海外体験を有する帰還移民は希ではなく、地域社会に影響力を与え始めている。

２．研究の目的

本研究は、インドネシアを中心に、人の移動と帰還移民を対象としている。従来の国際移動研究においては送出し国から受入れ国への一方向的な流れだけが主な研究対象となってきたのに対して、本研究では、出稼ぎ・契約労働者、研修生、留学生等さまざまなレベルの帰還移民が、移動という経験を通じて獲得する価値観、そして、送出し社会に与えうる社会経済的、文化的なインパクトを明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

(1)文献研究によるインドネシアにおける人の移動パターン、労働送出し制度に関する資料収集、(2)現地調査による人の移動パターンの把握とそれらを支える社会組織、制度の実態把握、(3)海外経験者のライフヒストリー聞き取り調査、(4)受入れ国及び送出し国における出稼ぎ／契約労働者、研修生、留学生などからの聞き取り調査を研究代表者および連携研究者がそれぞれの分担にもとづいて実施し、代表者が総括を行った。

４．研究成果

研究代表者である伊藤は、これまでインドネシアの南スラウェシを中心に人の移動の研究を進めてきた。そこでは、男性中心的であり、社会的ネットワーク、親族関係に依存した「連鎖的移住」であること、さらに、出身地域と移動先との間には一定の結びつきが見出されるなどの特徴が見出された。たとえば、マレーシア・サバ州への出稼ぎ労働者は、南スラウェシの男性が大半を占め、プランテーションや木材工場に従事する場合が多いのに対して、シンガポールへの労働移動は、スマトラおよびジャワ島出身の女性労働者が大半を占め、その多くがインドネシア政府労働･移住省と斡旋･派遣会社が一体化した､半ば公的な労働送り出しシステムに基づいている。前者が伝統的な出稼ぎ型に属するとすれば、後者は戦前にも見られた契約労働型の延長上に属すると言ってよい。

一方、こうした労働者送り出し制度と異なるのが、二国間の協定にもとづく研修生制度である。研修生の受け入れ国として本研究で扱うのは、日本である。企業研修生は､派遣国の日本人の中で働く場合が多い。また研修生は劣悪な労働環境と安価な賃労働を強いられていると一般に指摘されるものの、たとえばマレーシアのプランテーションや建設現場で働くことに比べれば、給与面は言うまでもなく労働環境面においても相対的に恵まれており、優位な選択になり得る。そうした研修生（これには 2008 年より受け入れの始まった外国人介護士・看護士を含む）としての経験が、本人、そしてかれらが帰還する地域社会にいかなる影響をもたらしうるかという設問が、本研究の課題であった。

以上を踏まえた上で､インドネシアにおける人の移動傾向を大まかにまとめればつぎのようである。まずインドネシアの人の移動は、国内移動と国際移動とに分けられる。

国内移動は「ムランタウ」(*merantau*) と呼ばれる伝統的な出稼ぎ労働から、近代的工業団地での工場労働者としての移動まで幅がある。「トランスミグラシ」(*transmigrasi*)は未開拓地にジャワやバリからの農民を送り込み農業開発を目指す国家政策であったが、農耕適地の減少と移民と地元民との摩擦に起因する民族間紛争の頻発などにより、スハルト退陣後のグス・ドゥール大統領時代に国家規模の国内移住政策はいったん中止され，州単位の「トランスミグラシ・ローカル」(*transmigrasi*

lokal)だけが継続するに至っている。ただし、自発的な国内移住はこの限りではない。一方、国際移動では、近年では、永住を目的する移動は非常に少なく、契約労働型が多くを占めようになっている。インドネシアで女性の国際移動が急増するのはアジア通貨危機が起きた 1997 年以降である。それ以前から中東諸国、マレーシアではインドネシアからの移民労働者を受け入れていたが、90 年代半ば頃より、新たに、シンガポール、香港、台湾へ主として家事労働者として赴くケースが急増している。以上のような人の移動の見取り図を理解した上で研究代表者、連携研究者（山下晋司、小池誠、内藤耕、長津一史、信田敏宏の諸氏)、研究協力者（山口裕子、河合洋尚、Riwanto Tirtosudarmono の諸氏)による諸報告を位置づけるとおおよそつぎのようになる。

まず、伊藤，小池、内藤、山口、河合、Riwanto は、インドネシア国外を主たる調査地として、それぞれの対象地域は、香港、台湾、韓国、マレーシア、日本、中国に滞在するインドネシア人労働者を対象としている。

本調査研究を通じて、伊藤は、香港で働く家事労働者の文芸活動に注目することで彼女らが社会的弱者ではなく、明確な主体性をもつ存在であること明らかにした。

小池は、台湾で労働経験をもつ労働者たちが自らがおかれた環境を内省することで、帰国後に社会福祉活動を実践する事例をとりあげて、労働者のもつ主体性を明らかにした。

内藤は、中部ジャワ農村の一家族の成長を追うことで、海外への出稼ぎがつぎなる起業に繋がるように、移民労働がすでにかれらの生活にとって必要な一部分になっている事実を指摘した。

山口は、南東スラウェシに居住する元日本研修生からの聞き取り調査を通じて、彼らの研修生として経験が次の生活のステップに結びついている点を指摘した。

河合は、第二次世界大戦から 1960 年代半ばのインドネシアの政治動乱期に帰国を余儀なくさせられた帰国華僑を扱い、かれらのライフヒストリーを通して帰国華僑の心象に見出される「インドネシア観」を描き出した。

Riwanto は、日本のムスリムコミュニティに着目し、福岡におけるイスラーム寺院建設について報告した。イスラーム寺院建設について日本（地方）政府は、不動産上の手続きを問題にするだけだが、より重要なのは地元住民からのコンセンサスであるという。その意味で、イスラーム寺院建設は住民の多文化主義の試金石になりうると指摘した。

長津の報告は、インドネシアの国内移動に関するものであるが通常の国内移住とはおおよそ様相を異にする海洋民社会についての報告である。ジャワ島の沖、カリマンタンとスラウェシ島の結節点となるサペカン島におけるバジョウ人の増大が、クレオール化（周辺海洋民の民族属性の変更）に基づくものであると指摘し、クレオール化がローカルなレベルでの民族間のせめぎ合いを通じて生じうる事実を指摘した。

以上 6 人の報告に対して、信田は、長年のフィールであるオラン・アスリのドリアン村を拠点に、定着化したオラン・アスリ社会の母系的傾斜について調査し、定着にともなう土地所有化、民族アイデンティティポリティクスとしての母系アダットの採用、外来首長の土着化など複数の要因が母系化の背景にあると指摘した。

最後に、山下は、2002 年のバリ爆弾事件の翌年からバリでおこなわれるようになった"*Gema Perdamaian*"（「愛と平和のこだま」)という催事に着目し、そこで提唱される多文化主義に着目した。それが単なる美辞麗句ではなく、地元観光業界の提唱によることに、バリ社会自身による「危機社会」への乗り越えの可能性を指摘した。

以上は本研究参加者の報告書の簡単な紹要約である。とくに女性移民労働者を取り囲む状況は相変わらず厳しく、国によっては毎週のようにハラスメント事件が報道されている。しかし、彼女らを含む移民労働者は単なる社会的弱者でも被害者でもない。本調査研究において、人の移動を個人のライフヒストリーという観点から捉え直すことによって、移民個人がそれぞれ有する主体性の諸相を提示し、そうすることで、従来の移民像とは異なる、グローバル時代を生きる移民の諸側面を明らかにすることができた。そうした個々人の主体性に着目することは、とかく物理的な存在、外的な存在として見なされがちな移民労働者像を見直す契機になると考える。(研究成果報告書『東南アジアにおける人の移動と帰還移民の再統合に関する社会人類学的研究』全 164 頁、序論の一部を修正抜粋)

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線）

〔雑誌論文〕（計 27 件）
1.伊藤眞　『生をつなぐ家　親族研究の新たなる地平』、査読無、信田敏広、小池誠編、pp.177-198、2013 年、風響社。
2.伊藤眞　「香港、ビクトリア公園にて－インドネシア人女性労働者とその可能性」、査読有、人文学報第 468 号、2013 年、pp.9-27.
3.伊藤眞「シンガポールの高齢者と家事労働者」、『人文学報』、査読有、第 453 号、2012 年、19-42 頁。
4.伊藤眞「海外日本人社会の組織化と分節化－タイ、チェンマイを中心に－」『人文学報』、査読有、第 423 号、1-20 頁、2010 年。
1.山下晋司　「2050 年の日本―フィリピーナの夢をめぐる人類学的想像力」『文化人類学』、査読有、75(3)号、2012 年、327-346 頁。
2.山下晋司　「一つの世界にともに生きることを学ぶ―滞日外国人と多文化共生」『アメリカ太平洋研究』、査読有、112 号、44-53 頁、2012 年
3.山下晋司　「グローバル化の中の観光まちづくり―震災後も視野に入れて観光人類学の視点から考える」、『都市計画』、査読有、61(1) 12-15 頁、2012 年。
4.Yamashita Shinji　“Human Trafficking as a Process: A Perspective of Human Security and Public Anthropology”　査読有,CDR Quarterly 5: 2-13, 2012.
5.Yamashita Shinji　“Global touristscapes in a rain forest: Ecotourism in Sabah, Malaysia”　査読有, Cathy H.C. Hsu and William C. Gartner eds. The Routledge Handbook of Tourism Research. Pp. 359-372.2012, London and New York.
6.Yamashita Shinji“The Public Anthropology of Disaster: An Introductory Note.” 査読有,Asian Anthropology 11: 21-25, 2012.
7.Yamashita Shinji　“Here, There, and in-between: Lifestyle Migrants from Japan”　査読有, Wind over Water: Migration in an East Asian Context (co-ed. with David W. Haines and Keiko Yamanaka), New York and Oxford, pp.161-172, 2012.
8.山下晋司　“Post-Colonial Tourism in Multicultural Japan: Korean Town in Okubo District, Shinjuku, Tokyo”　査読有,『金沢大学日中無形文化遺産プロジェクト報告書第 13 集・国際シンポジウム観光から見る東アジアのエスニシティと国家 Exploring Ethnicity and the State through Tourism in East Asia』pp.29-36, 金沢大学人間社会研究領域.2011 年。
9.Yamashita, Shinji　“A 20-20 Vision of Tourism Research in Bali: Towards Reflexive Tourism Studies”, 査読有, Tourism Research A 20-20 Vision (Douglas G. Pearce and Richard W. Butler eds.) pp. 161-173,Oxford: Goodfellow Publishing, 2010.
1.小池誠「台湾におけるエスニック・メディアが作り出すインドネシア女性労働者のネットワーク」、『国際文化論集』、査読無、第 46 号、1-31 頁、2012 年。
2.小池誠・佐藤浩司・西山マルセーロ共著「インドネシア、スンバ島の家づくり――ウンガ村慣習家屋再建プロジェクト報告」、査読無、『竹中大工道具館研究紀要』22、3-87 頁、2011 年。
3.小池誠「スンバで家を建てること――インドネシアとの文化的交流を深めるためのプロジェクト報告（1）」『桃山学院大学総合研究所紀要』、査読無、36-1 号、195-211 頁、2010 年。
4.小池誠「インドネシア・カラワンにおける日系工業団地進出と周辺農村社会に生きる家族の変容」、2010 年 12 月『南方文化』、査読有、37 号、45-59 頁、2010 年。

1.長津一史　「東南アジア海域世界における『海民』の生成過程――インドネシア・スラウェシ周辺海域のサマ人を事例として」『白山人類学』、査読有、15: 45-71、2011 年。
2.長津一史「東南アジアの交易をめぐる海民社会のダイナミクス」、査読有、『季刊民族学』133: 47-51、2010 年。
3.Nagatsu Kazufumi　"Introduction －Reconsidering Social History of Maritime Worlds in Southeast Asia:Perspectives from the Sama-Bajau－," 査読有、Hakusan Review of Anthropology 13: 1-2,2010.
4.Nagatsu Kazufumi "A Preliminary Spatial Data on the Distribution of the Sama-Bajau Population in Insular Southeast Asia," 査読有、Hakusan Review of Anthropology 13: 53-62. 2010.
1.信田敏宏「親族システムの理念と実践――マレーシア、オラン・アスリ社会の母系制」査読有、『国立民族学博物館研究報告』37(3)、2013 年、311-330.
2.信田敏宏「分断されるコミュニティ、創造するコミュニティ――マレーシア、オラン・アスリのコミュニティの再編」、査読無、平井京之介編『実践としてのコミュニティ――移動・国家・運動』京都：京都大学学術出版会、2012 年、pp.161-186.
3.信田敏宏「『市民社会』の到来――マレーシア先住民運動への人類学的アプローチ」『国立民族学博物館研究報告』，査読有、35(2)、2010 年、269-297 頁。
1.山口裕子「インドネシア東南スラウェシ州における元研修生の移動と帰還後の再統合

過程」査読無、(平成 22～24 年度科学研究費補助金・基盤研究(B)一般「東南アジアにおける人の移動と帰還移民の再統合に関する社会人類学的研究」代表：伊藤眞）報告書、57-88 頁、2013 年。
2.山口裕子「インドネシア・ブトン社会における歴史語りの社会人類学的研究」査読無、三島海雲記念財団（編）『研究報告書　平成 24 年度』49 号、16－20 頁、2012 年。
3.山口裕子「王は主体か客体か：第 8 回全国クラトン・フェスティバル見聞記」査読無、日本インドネシア NGO ネットワーク（編）『インドネシア　ニュースレター』81 号、13－28 頁、2012 年。
4.Yamaguchi Hiroko "'True History' in Wabula, Buton Island", 査読有、in The Asia Pacific Journal of Anthropology. Vol. 12, No. 5, pp. 478-488, 2011.
1.河合洋尚「空間概念としての客家――『客家の故郷』建設活動をめぐって」査読有、『国立民族学博物館研究報告』（国立民族学博物館）37(2): 199-244、2013 年。
2.河合洋尚　「中国客家地域におけるインドネシア帰国移民の再統合」査読無、伊藤眞（編）『東南アジアにおける人の移動と帰還移民の再統合に関する社会人類学的研究」平成 22～24 年科学研究費補助金基盤研究(B)報告書、pp.89-105、2013 年。
3.Kawai Hironao "Creating Multiculturalism among the Han Chinese: Production of Cultural Landscape in Urban Guangzhou." 査読有, In Asia Pacific World, No.3-1, New York and London, International Association for Asia Pacific Studies (国際アジア太平洋学会), pp. 39-56, 2012 年.

〔学会発表〕(計 34 件)
1.Ito Makoto "Foreign Domestic Helpers in Hong Kong: Rights, Unions, and Citizenship", The East Asian Anthropological Association, July 7, 2012, The Chinese University of Hong Kong. 中国。
2.伊藤　眞「インドネシア人女性の保健衛生環境－JICA母子保健プロジェクトを 顧みつつ－」、『東南アジアにおける新興・再興感染症の流行最小化に寄与する総合的な予防医学的システムの構築―迅速・高信頼性感染症スクリーニングシステムの開発―』東京都高度研究公開シンポジウム成果報告会、2012 年 3 月、首都大学東京。
3. Ito Makoto "Sulawesi Selatan Sekitar tahun 1950an", ITP International Symposium, 2011 年 12 月、京都大学.
4. Ito Makoto "Indonesian domestic workers are resisting: in the case of Hong Kong", Society for East Asian Anthropology & Korean Society for Cultural Anthropology, 2011 年.8 月、Chonbuk National University, 全州、 韓国。
1. 山下晋司「3.11 と観光：リスク社会の中で」、日本文化人類学会　2012.6.24、広島大学。
2.Yamashita Shinji "Multiculturalism in East Asia: A Comparative Perspective" (Panel organizer and chair), East Asian Anthropological Association, 2012.7.7. Chinese University of Hong Kong. 中国。
3. Yamashita Shinji "Gema Perdamaian: Tourism, Religion and Peace in Multicultural Bali" Bali Conference 2012: Bali in Global Asia, 2012.7.18. Unadyana University, Denpasar, Bali.インドネシア。
4. Yamashita Shinji "Hybridity in Transnational Japan: New Paths beyond Multi-ethnic multiculturalism (Panel organizer and chair) The 111th Annual Meeting of American Anthropological Association 2012.11.15 、サンフランシスコ、アメリカ。
5. Yamashita Shinji "The 3.11 East Japan Disaster and Tourism: In Pursuit of "Kizuna" (Social Ties) American Anthropological Association 2012.11.18 サンフランシスコ、アメリカ。
6. Yamashita Shinji "Neither Tourists nor Migrants: Bridging Tourism and Migration Studies." 論文発表.第 12 回国際観光研究アカデミー隔年次大会.2011.6.6-12.嘉義、台湾。
7. 山下晋司 「一つの世界にともに生きることを学ぶ―滞日外国人と多文化共生」. 論文発表. 東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構／CPAS公開シンポジウム「移民・難民・市民権――環太平洋地域における国際移民」. 2011.6.24.　東京大学。
8. Yamashita Shinji "The Public Anthropology of Disaster: The East Japan Earthquake". 国際シンポジウム Light and Shadow in East Asia: Health, Wealth and "Hungry Ghosts." 2011.9.8-11. 国立民族学博物館.
9. Yamashita Shinji "Tourism, Religion and Peace: Balinese Experiences." 第 111 回アメリカ人類学会. 2011.11.16-20. モントリオール、カナダ.
10. Yamashita Shinji "Imagining Japan 2050: A Multicultural Scenario and Filipina Migrants' Dreams." A Paper Presented at the 11th Biennial Conference of the European Association of Social Anthropologists, August 24-27, 2010, Maynooth, アイルランド。

11. Yamashita Shinji “Human Trafficking, Human Security, and Public Anthropology. A Paper Presented at the International Conference on Forcing Issues: Rethinking and Rescaling Human Trafficking in the Asia-Pacific Region.” October 4-5, 2010, National University of Singapore, シンガポール。

12. Yamashita Shinji “Post-colonial Tourism in the Multicultural Japan: Korean Town in Okubo District, Shinjuku, Tokyo. A Paper Presented at the Symposium: Exploring Ethnicity and the State through Tourism in East Asia. November 5-7, 2010, 金沢大学。

13. Yamashita Shinji “Politics of Migration in the Age of Global Cultural Circulation: Japan and Beyond.” Panel Organizer. The 109th Annual Meeting of American Anthropological Association, November 17-21, 2010, New Orleans, アメリカ。

1. Nagatsu Kazufumi, ″Jalan Tikus on the Sea: Persisting Maritime Frontiers and Multi-layered Networks in Wallacea,″ Asian CORE Program Seminar “Interface, Negotiation, and Interaction in Southeast Asia,” February 22, 2013, Kyoto: CSEAS, 京都大学。

2. 長津一史 「人文社会系地域研究における空間情報の利用―インドネシアとフィリピンの民族分布図を題材に」上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科特別講演会、2013 年 1 月 15 日、上智大学.

3. Nagatsu Kazufumi, ″Genealogy of the Maritime Creole and its Socio-ecological Settings in Wallacea,″ Asian CORE Program Seminar “Interface, Negotiation, and Interaction in Southeast Asia,” February 28, 2012, Academia Sinica, 台湾。

4. Nagatsu Kazufumi, ″On Maritime Frontier: A Socio-Ecological Setting and Identity of the Sea Folks in Wallacea,″ presented at The 7th Kyoto University Southeast Asia Forum: Politics, Livelihood and Local Praxis in the Era of Decentralization in Indonesia, January 8, 2011, Hasanuddin University, インドネシア。

5. 長津一史 「マレーシア・サバ州の跨境社会における開発の政治過程――サマ人の自己表象に着目して」東南アジア学会第 85 回研究大会、2011 年 6 月 12 日、札幌：北海道大学.

6. 長津一史 「『バジャウ・ラウト』はいかに生成したか――マレーシア・サバ州の境域における自己表象の動態」白山人類学研究会第 5 回年次研究フォーラム、2011 年 3 月 26 日、東京：東洋大学.

7. Nagatsu Kazufumi, ″Bajo as Maritime Creole,″ presented at International Symposium on Studies on Remote Islands and the Societies in Indonesian Archipelago, December 30, 2010, Semarang: Pusat Studi Asia, Diponegoro University, インドネシア。

1. 信田敏宏 国立民族学博物館共同研究「アジア・アフリカ地域社会における<デモクラシー>の人類学――参加・運動・ガバナンス」（研究代表者：真崎克彦（国立民族学博物館）題目：「ローカル・ポリティクスとデモクラシー――マレーシア先住民の事例から読みとく」、2011 年 11 月 29 日。

2. 信田敏宏 国立民族学博物館機関研究「支援の人類学」国際シンポジウム「グローバル支援の時代におけるボランタリズム――東南アジアの現場から考える」（国立民族学博物館）、題目：「NGO活動の現場における人類学者のポジショナリティ――マレーシア先住民社会のフィールドワークから」2011 年 11 月 5 日。

3. 信田敏宏 ・パネル「島嶼部東南アジアの開発過程と境域――アイデンティティの再構築をめぐって」東南アジア学会第 85 回研究大会（北海道大学）題目：「周縁の開発、アイデンティティの行方――マレーシアのオラン・アスリ社会における『開発の社会史』」2011 年 6 月 12 日。

4. 信田敏宏「マイノリティと音楽の複合的関係に関する人類学的研究」（研究代表者：寺田吉孝）（国立民族学博物館）、題目：「マレーシア先住民と音楽――アイデンティティ・文化復興・先住民運動」 2010 年 12 月 18 日。

5. 信田敏宏 平成 22 年度みんぱく若手研究者奨励セミナー「国境を越える市民社会と人類学」（みんぱく教員講演）（国立民族学博物館）題目：「先住民運動のエスノグラフィー―オラン・アスリのフィールドワークか」

2010年11月24日。
1. 山口裕子　「周辺社会の国家英雄：インドネシア東南スラウェシ州の事例から」東南アジア学会関西地区例会個人発表（於：京都大学 、2012年7月14日
2. 山口裕子「現代インドネシア周辺社会における歴史語りの対話空間とその創造過程：複数の対抗的なブトン王国史」第45回日本文化人類学会研究大会個人発表（於法政大学 、2011年6月11日。
3. 山口裕子「歴史語りの『真実さ』をめぐって：インドネシア東部の小地域社会における複数の対抗的な『ブトン王国史』」第9回日本オーラル・ヒストリー学会大会個人発表（於：松山大学)、2011年9月11日。
1. 河合洋尚「客家都市の建設――梅州市における華僑ネットワークと景観創造」、国際フォーラム「漢族社会におけるヒト、文化、空間の移動――人類学的アプローチ」、2012年11月3日、国立民族学博物館。
2. 河合洋尚　「趣旨説明」「『客家らしい』景観の創造と再解釈――広東省梅州市の都市部の事例より」日本文化人類学会東アジア公共人類学懇談会・東アジア人類学研究会共催シンポジウム「文化のフロー――東／東南アジアにおける言説・モノの流動と摩擦」、2012年7月22日、早稲田大学。

〔図書〕（計11件）
1. 伊藤眞編　『多文化都市と新相互行為圏（NIZ)の形成－新しい「国際移動研究センター」構築に向けた研究』312頁、平成22年度～平成24年度首都大学東京傾斜的研究費研究成果報告書、全312頁、2013年、首都大学。
2. 伊藤眞編 『東南アジアにおける人の移動と帰還移民の再統合に関する社会人類学的研究』平成22年度～平成24年文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (B)研究成果報告書、全164頁、2013　年、首都大学東京。
3. 伊藤眞編『東アジアにおける高齢者のセイフティネットワーク構築に向けての社会人類学的研究（その2)』、全42頁、2011年、首都大学東京。
4. 伊藤眞編『東アジアにおける高齢者のセイフティネットワーク構築に向けての社会人類学的研究』、全242頁、2010年、首都大学東京。
1. 小池誠・信田敏宏編『生をつなぐ家―親族研究の新たな地平』、全338頁、2013年、風響社。
1. 長津一史「インドネシアの二〇〇〇年センサスと民族別人口」鏡味治也（編）『民族大国インドネシア―文化継承とアイデンティティ』東京：木犀社、2012年、37-48頁。
2. 長津一史「異種混淆性のジェネオロジー―スラウェシ周辺海域におけるサマ人の生成過程とその文脈」鏡味治也（編）『民族大国インドネシア―文化継承とアイデンティティ』東京：木犀社、2012年、249-284頁。
1. 山口裕子『歴史語りの人類学：複数の過去を生きるインドネシア東部の小地域社会』、全408頁、2011年、世界思想社。
2. 山口裕子『由緒の比較史（歴史学の現在12)』歴史学研究会（編)、担当部分：「たくさんの『ブトン王国史』：現代インドネシア地方社会における歴史語りの対話空間とその創造過程」259－302頁、2010年、青木書店。
3. 山口裕子『人＝間の人類学：内的な発展と誤読』中野麻衣子、深田淳太郎（編著)、担当部分：「インドネシア・ブトン島ワブラ社会の歴史語りの民族誌：巡礼、農事暦儀礼と『真実の歴史』」59－79頁、2010年、はる書房。

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
伊藤　眞（　ITO MAKOTO　）
首都大学東京・人文科学研究科・教授
研究者番号：60183175
(2)　研究分担者　なし
(3)連携研究者
山下晋司（YAMASHITA SHINJI）
東京大学・総合文化研究科・教授
研究者番号：60117728
小池　誠　(KOIKE MAKOTO)
桃山学院大学・国際教養学部・教授
研究者番号：00221953
内藤　耕　（NAITO TAGAYASU)

東海大学・文学部・教授
研究者番号：30269633
長津一史　(NAGATSU KAZUHFUMI)
東洋大学・社会学部・准教授
研究者番号：20324676
奥島美夏　(OKUSHIMA MIKA)
天理大学・国際学部・准教授
研究者番号: 10337751
信田敏宏　 (NOBUTA TOSHIHIRO)
国立民族学博物館・文化資源研究センター・准教授
研究者番号：77336501